



# 犬の妊娠と出産

今回は犬の妊娠と出産についてお話します。

## 性成熟

性成熟とは、オスでは造精機能が成熟し、雌と交尾して妊娠させる状況に達したこと、雌では妊娠・分娩が可能な状況に達したことを指します。犬の性成熟は生後 10-16 ヶ月といわれ、一般に小型犬は大型犬に比較して早い傾向にあります。そして性成熟後、雌犬は 6-10 ヶ月の間隔で定期的に発情を繰り返します。

## 性周期

犬の性周期は発情前期、発情期、発情休止期、無発情期に分けられます。  
発情前期:発情出血の開始から雄犬に交尾を許す期間。外陰部が腫大、充血し、発情出血が起きます。また、動作に落ち着きがなくなり、多飲、多尿になります。  
発情期:発情期は雌犬が雄犬に交尾を許す期間であり、犬の排卵は発情期の 3 日目に起きます。  
発情休止期:妊娠の有無にかかわらず黄体ホルモンが分泌されます。ホルモンの影響により、個体によっては偽妊娠と呼ばれる状態になります。  
無発情期:卵巣が休止している期間です。

## 交配適期

交配に適した時期は排卵前 48 時間から排卵後 120 時間の約 7 日間とされています。交配適期の判断は膣の粘膜を採取することによってある程度推測が可能です。

## 妊娠期間

妊娠期間は交配後約 62-64 日です。交配および出産を行うのであれば、その間は予防接種は行わないことがよいので、その前に計画的に行っておきましょう。またフィラリアの予防薬は妊娠中に飲ませて問題ありません。その他薬剤に関しては、獣医師にご確認ください。

## 妊娠診断

妊娠診断には超音波検査と X 線検査があります。

### 超音波検査

交配より 24-30 日から胎子の確認が可能です。X 線検査よりも早期に妊娠の診断が可能であり、心拍を確認することで胎児の生存を確認することが可能です。ただし、胎児数を正確に判定出来ない可能性があります。

## X 線検査

母犬の骨盤、胎子の数、体位、大きさなどが確認できます。胎子の骨格は犬でおおよそ妊娠 42-45 日で骨化がはじまるので、この時期から X 線検査が可能になります。ただしこの時期はまだ骨化が不十分なこともあるため、交配後 50 日を過ぎてからの X 線検査をおすすめしています。

## 出産

分娩数日前から母犬は落ち着きがなくなってきます。分娩の兆候として体温の低下があげられます。犬の平均体温は約 38℃ですが、分娩の半日前には体温が低くなり、そのため体温をあげようとして震えを起こします。また、安心して分娩させるために、分娩の 1 週間位前より出産場所を準備し、母犬が安心する静かな環境作りをしてあげるとよいでしょう。

## 難産の兆候

- ①陰陰部から緑のおりものがみられる(胎盤剥離)。
- ②陰部から透明(あるいは少し緑色)の液体が大量に出た(=破水)のに、2時間たっても赤ちゃんが出てこない
- ③赤ちゃんの体の一部が出ているが、それ以上出てくる様子がない。
- ④体温低下がみられてから1日以上たっているのに出産する様子が見られない。
- ⑤予予定日を過ぎても出産しない、体温が下がらない。

上記の場合は難産であることが考えられますので、病院に連絡してください。特に (1)-(3) は緊急性が非常に高く重要です。

難産の可能性が高い犬種として、イングリッシュ・ブルドッグ、ボストンテリア、ボクサーをはじめとする短頭腫があげられます。これらの犬種は分娩前に母犬の骨盤のサイズと胎児の頭蓋骨のサイズから難産予測が可能です。自然分娩が難しいと判断した場合、帝王切開が必要になります。

また、小型犬でも(特に初産の場合)難産が起こりやすいため、注意が必要となります。

## 参考文献 小動物の臨床繁殖産学